



# 近江源氏・佐々木一族

近江の豪族「ササキ」の名は、酒器から出たという説もあるが、陵守をした種族であったので、この陵に因んで佐々木と名付けられたという説もある。そして、佐々木は沙々貴、狭々城、佐々城、佐々貴にも通じるという。

「古事記」「日本書紀」によれば、第二十代安康天皇は、市辺押磐皇子に皇位を譲ろうと考えていたが、同母弟の大泊瀬皇子が、自ら皇位に就こうと思ひ、近江の豪族の狭々城山君韓侗と共謀して、久多綿の蚊屋野に猪や鹿が多いから狩りに行こうと、市辺押磐皇子を誘い出し、大泊瀬皇子が、市辺押磐皇子を射殺してしまった。ところが、この罪は韓侗だけに着せて、自分は皇位を継いで、第二十一代雄略天皇となった。次に、その皇子の白髪皇子が、第二十二代清寧天皇となった。だが、清寧天皇に皇子がなかったので、播磨国上の家に隠れていた市辺押磐皇子の遺児、弘計主を探し出して皇位につけた。それが第二十三代顕宗天皇である。その顕宗天皇が、亡父の遺骨を探し求めていたところ、狭々城山君と同族の倭侗宿禰の妹置目が、馬のかいば桶に入れられて蚊屋野に埋められていると教えたので、掘り出して東の山に葬った。置目の功績によって、兄の倭侗が、本姓の狭々城山君を継いだ。この子孫が大いに繁栄して、中古になると、蒲生郡と神前郡の大領となった。ちなみに、天平18年8月紀に「蒲生郡大領正八位上佐々貴山君親人、従五位下」と、同様に「神前郡大領正八位下佐々貴山君足人、正六位上」と記されている。

一方、佐々木氏系譜によれば、第五十九代宇多天皇の第九皇子の敦実親王が、源姓を賜

わって宇多源氏の始祖となった。それが、雅信、扶義、成瀬と続き、成瀬が守護代となって、初めて近江に下向し、成瀬の孫の経方のとき、佐々木庄の下司職となり、小脇（現・八日市市小脇）に住みつき、はじめて佐々木姓を称したという。

ところが、経方の曾孫の定綱が、鎌倉幕府の創設者である源頼朝から、近江守護職に任じられてからは、狭々城山君一族は、主客ところを変え、一頃は、沙々貴氏とか、佐々貴氏とか、本佐々木などと称していたが、次第に、宇多源氏の佐々木氏に圧迫同化され、狭々城山君一族の、祖先を祀る氏神としていた「沙々貴神社」も、共同の氏神のようになってしまった。そして宇多源氏方は、大泊瀬皇子の兄殺しに加担した、狭々城山君韓侗が合祀されているのを嫌って、宇多源氏の始祖敦実親王に取り替えてしまった。

つまり、当地の名族、狭々城山君の地盤は、宇多源氏を名乗る佐々木氏に、侵漁されてしまったのである。狭々城山君一族のなかに、佐々木俊綱という人物がいたが、彼は義経の旗下にあって、一の谷の戦いに加わって活躍し、平通盛を討ちとる功をあげた。俊綱の父成綱が喜び、鎌倉に下って、頼朝に恩賞を請うたところが、頼朝は、成綱が平治の乱以後平氏に属し、平氏の都落ちの後に、源氏に味方したことを理由に恩賞を与えず、守護職である佐々木定綱の指揮の下にという条件つきで、佐々木庄内にある本知行地を、元のままで安堵したのにとどめた。このことが、後々まで、両者の力関係となり、狭々城山君の子孫は、沙々貴神社の神官職だけに甘んじなけ

ればならず、宇多源氏の佐々木氏が、いつの間にか、沙沙貴神社を自分たちの氏神にしてしまったのも、その力関係のためである。

この間の消息を「東浅井郡志」は、いみじくも次のように述べている。

「下司の佐々木氏は、本佐々木氏に接木することによって、佐々木宮の神威を蒙ることを得べく、神主の本佐々木氏は、佐々木氏を接木せしむることによりて、皇室奉戴の余栄を仰ぐことを得べし。かくて両者こもごも利をとりて、この系図の融合をはかりしもの如し。ひとり系図の融合のみならず、また婚姻によりて血液の融合も来たした。かくて、宇多源氏の佐々木氏は、佐々木庄の総管領となり、本佐々木の諸族は、ことごとくその被官になりて、ついに、全く君臣の別を生ずるに至れり」

現在は、両族の子孫が集まって、毎年10月10日、沙沙貴神社で、仲良く佐々木同族会を催している。ちなみに、姓氏家系辞書（秋田書店刊）によれば、佐々木氏族は、萬木、葛岡、鏡、澤田、大原、白井、本江、夫馬、竹谷、高島、朽木、横山、田中、永田、市原、平井、太田、下坂、唐橋、西條、鳥山、黒田、大鹿、岩山、松下、長岡、永谷、高屋、倉知、馬淵、長江、堀部、青地、佐保、伊佐、山中、加地、磯部、小島、古川、東郷、飽浦、倉田、野村、中村、信村、野木、大山、隠岐、塩冶、大熊、富田、萩原、後藤、駒崎、古志、吉田などの諸氏がある。佐々木宗家では、江南六角流と江北京極流があり、前者の庶流に、堀部、森川、山内、鳥羽、藤島、川島、栗本、高井、梅戸などの諸氏がある。後者では、岡



田、松田、浜河、松下、高松甲良、金吾、浜川、尼子、宗道、溝口らの諸氏がある。なお、明治時代の武人・乃木希典大将、三井財閥の祖・三井八郎兵衛高俊も、佐々木氏の同族である。その他にも同族はいる。

ともあれ、近江源氏の佐々木氏が、歴史的にクローズアップされたのは、保元・平治の乱に、悪源太義平十六騎の一人として活躍した、佐々木源三秀義が最初であった。

秀義は、奥州の豪族安倍宗任の娘を母として生まれ、13歳のとき源為義の猶子となり、為義の一字をもらい源三秀義と名乗った。しかし、保元の乱のとき、為義の長男義朝方につき為義と戦った。また、平治の乱でも義朝の旗下にあって戦い、義朝とともに敗北を喫した。そのために秀義は、佐々木庄の領地を失った。そののち秀義は、相模国の渋谷庄司重国の庇護をうけ、重国の娘を娶って五男義清をもうけている。そして、源頼朝が伊豆に流されたとき、秀義は、常にその謫居<sup>たくき</sup>に出入して君臣の礼をとり、定綱を頼朝に仕えさせた。

治承4年(1180)、頼朝が伊豆国府庁の目代山木兼隆を襲い、平氏打倒の挙兵をしたとき、太郎定綱、次郎経高、三郎盛綱、四郎高綱、五郎義清の兄弟が、父秀義とともに、その旗下に加わった。このとき頼朝勢は、九十騎に過ぎなかったといわれるが、山木兼隆の首を討ちとったのは三郎盛綱であった。

秀義は、それから四年後の元暦元年7月、油日の戦いで流れ失に当り、落馬して死んだ。ときに、73歳であった。

それから、佐々木兄弟は、常に頼朝の旗下にあって、緒戦から平氏滅亡の日まで、第一線で活躍し、数知れぬ軍功をたてた。ことに、四郎高綱の宇治川の先陣争いは、あまりにも有名である。

この逸話は、宇治川を挟んで、義仲軍と義経軍が対峙したとき、義経軍の佐々木高綱と梶原景季が、頼朝から拝領した名馬生食<sup>いけずき</sup>と磨<sup>する</sup>

墓に跨って宇治川に飛びこみ先陣争いをしたが、生食に乗った高綱が勝って、一番乗りを果たした。そして、その勇姿に続く義経軍のために、義仲軍は敗退してしまった。

文治元年(1185)11月、頼朝は、諸国に守護・庄園に地頭を置いて、鎌倉幕府の支配体制を確立させたが、このとき、太郎定綱は近江・石見・長門3か国の守護職と、さらに隠岐の地頭職に任ぜられ、次郎経高は淡路・阿波・土佐3か国の守護職、三郎盛綱は伊予・讃岐・越後・上野4か国の守護職、四郎高綱は備前・安芸・周防・因幡・伯耆・出雲・日向7か国の守護職に任ぜられた。

このように兄弟4人で17か国の所領を与えられたことは、類のないことであった。頼朝が、拳兵以来の佐々木兄弟の労苦に報いたものであることは、いうまでもない。

ことに定綱が近江守に任じられたことは、佐々木の総領として、平治の乱で失った父祖の地を回復させた、頼朝の温情であった。

そして定綱は、<sup>まがさ</sup>織山(別名観音寺山)に本拠を構え、近江源氏佐々木氏の始祖となる。

定綱は、元久2年(1205)4月9日に死んだが、佐々木総領職は嫡子広綱が継いだ。その広綱は、定綱と同じように左御門尉檢非遺使として京都に居て、執権北条義時の命令で、京都守護職平賀朝雅を討伐し、東寺の宝蔵を荒した盗賊を退治するなどの活躍をしていたが、父の跡目を継いでから16年後の、承久3年(1221)5月に、承久の乱が起こった。それまでの間、広綱は後鳥羽上皇の恩遇をこうむり、山城守に任ぜられていた。

5月14日、上皇は鳥羽離宮の城南宮で流鏑馬を催すと称して近江、畿内、在京の武士を集めた。広綱も兵を率いて上皇のもとへ馳せ参じた。翌15日、広綱は上皇の命により、京都守護職伊賀光季を高辻京極の館に攻め、光季を自刃に追いやった。上皇は、その日に執権北条義時追討の宣旨を下し、承久の乱の口火を切ったのである。

この報を聞いた義時は、直ちに東国15か国の武士に動員令を発し、弟時房と嫡子泰時に大将を命じ、総勢十九万騎の大軍をもって京都に向かわせた。そのなかには、鎌倉に勤仕していた広綱の弟信綱も加わっていた。

このとき、佐々木4兄弟のひとり四郎高綱は、隠世していたので戦いに加わらなかったが、高綱には兄で、広綱には叔父に当る次郎経高は、その子高重が、北面の武士として御所の警備に当たっていたため、高重とともに上皇方に従った。さらに、三郎盛綱も同じく上皇方に属した。

この承久の乱は、結局、上皇方の惨敗で終局を迎えたが、広綱の甥の鏡久綱が、大豆戸の渡しで討ち死にし、広綱の二男は宇治で、次郎経高の嫡子高重は、勢多において討ち死にした。のちに、次郎経高も自刃した。

広綱は、幕府軍に捕えられて斬首され、その末子勢多伽丸も捕えられて首を討たれた。広綱の弟信綱だけが、幕府軍に従って四郎高綱に倣って宇治川で先陣の功をあげ、父定綱や兄広綱の遺領をすべて継ぎ、佐々木家総領職となって、近江守護職に任じられた。佐々木一族にとって、この承久の乱は一大悲劇であり、同族間で血で血を洗う内紛の発火点となったのである。

信綱は晩年になって遁世するが、これに先だち、近江守護職と佐々木家総領職を三男泰綱に譲り、佐々木庄本邸に住ませ、京都六角東洞院の館と、愛知川以南の近江六郡の地頭職を与えた。一方、四男氏信には、愛知川以北の近江六郡の地頭職を譲り、京極高辻の館を与えた。長男重綱は坂田郡大原庄、次男高信は高島郡田中庄しか与えられない不平等な配分だったが、泰綱と氏信が北条泰時の妹が母であったといえれば納得がいく。

信綱は晩年に髪をおろして仏門に入り、高野山の蓮華三昧院で、仁治3年(1242)、62歳で死んだ。

そののち、泰綱の子孫が六角佐々木、氏信

の子孫が高極佐々木と名乗って、本家総領職をめぐる累々と争うことになる。ことに京極道誉が、伊吹の上平寺城を本拠に威勢をはり、足利尊氏を援けて活躍する南北朝時代には、その威勢が南近江まで広がりつつあった。尊氏が足利幕府を創設し、道誉が近江守護職に任じられると、その主導権の争いは、益々、深刻化していった。

そして、応仁元年(1467)3月に勃発した応仁の乱では、京極持清が近江、飛驒、出雲の兵万余騎を従えて東軍の管領細川勝元方に加わると、六角高頼が近江勢五千余騎を率いて、西軍の山名宗全方に加わるといった具合に、近江源氏佐々木氏一族が、まさに真っ二つに分れて、血で血を洗う闘争をくりかえすことになった。

そののち、京極家では家督相続が原因で、延々、36年間も内紛を続けていた。その内紛を、巧みに利用したのが浅井亮政である。はじめ、京極家に仕えていた浅井氏が、亮政の代になって小谷山に居城を築き、京極家の老臣上坂家信を滅亡させて勢力をのぼし、子の久政、孫の長政の代まで、およそ50年間で江北に君臨し、ついに、京極家は浅井家の風下に立たされるようになった。

永禄11年(1568)9月、足利義昭を奉じて、上洛制覇を企てた織田信長が、六角征伐のため近江に侵入したころには、浅井家が北近江を、六角家が南近江を分領し、近江の覇権を競いあっていたのである。わずかに命脈を保っていた京極高吉が、いち早く信長と気脈を通じ、浅井長政が朝倉義景と同盟して、信長に反旗をひるがえしたとき、高吉は小法師と呼ばれていた八歳の高次を、人質として岐阜城の信長に送り、信長に忠誠を誓ったのである。

一方、信長から攻められた六角義賢は、その侵攻の前に、居城の観音寺城を捨てて伊賀の里に遁走していて、再々、三好三人衆や本願寺門徒などの援助を得て信長に抵抗した

が、元亀元年(1570)に降伏して、佐々木家総領職の六角家は滅亡してしまった。

だが、佐々木氏一族の京極家では、高次が11歳のとき、つまり、天正元年(1573)に、信長が足利義昭を榎島に攻めたとき、その寄せ手に加わった功で、大野大和守の欠所である、蒲生郡の奥島で五千石を与えられた。ところが、10年後の天正10年6月、信長が本能寺の変で死ぬと、高次は明智光秀方に加わり長浜城を攻めた。しかし、これは高次の誤算で、光秀が山崎合戦で敗北すると羽柴秀吉に追われた。高次は、越前の柴田勝家をたよったが、勝家が賤ヶ岳合戦で秀吉に敗れると、次は、妹の松の丸が嫁ぐ若狭の武田元明をたよった。秀吉は元明を殺害し、その妻松の丸を側室にし京極局と名付けた。高次は、その妹京極局のとりなしで、その罪を許され高島郡田中郷で二千五百石をもらい、秀吉の九州征伐に従軍して大溝一万石、小田原征伐で近江八幡二万八千石、朝鮮の役で六万石の大津城主という風に、トントン拍子に出世したので、世間では「妹の尻の光りで出世した、ホテル大名」と陰口をたたく者も現われた。

それから15年後に関ヶ原の役が勃発した。高次の妻は浅井長政と信長の妹お市の間に生まれた於はつであったから、姉の淀殿、徳川秀忠の妻於とくの三姉妹の義理に挟まれて、その去就に迷ったのだが、徳川方に加わることにした。大津城で12日間も西軍二万七千を釘づけにした功で、家康から、八万五千石の小浜城主を与えられ、さらに、高島郡で七千石を加封されて見事に京極家を再興した。

高次の子忠高は、出雲、隠岐2国二十六万四千石を与えられていたが、忠高の急逝で嗣子を定めていず、一時、絶家を宣告されたが、高次の二男高政の子高和が、京極の家督を相続し、万治元年(1658)讃岐丸亀藩六万六十七石に転封され、その子孫は、無事に明治維新を迎えたのである。

(徳永真一郎氏提供)